

1 本実践が目指す授業デザイン

2 学年間のまとめの題材における本実践では、「自分の生活をよりよくするための方法を選択・決定し、獲得した知識や技能を自分の生活の舞台へ広げていく」という、家庭科における自律した学習者の姿を目指している。

社会状況の変化への対応が直接学習内容として求められる家庭科において、今後一層進む超少子高齢化や単身世帯の増加等、家庭の形が変わりゆく実相を踏まえ、人との関わりをどのように学ばせ、生活化を図っていくかが大きな課題である。本実践に係る題材「感謝をかたち」(内容A)では、第6学年の卒業期、これまでに習得した知識や技能を生かし、学習全体を通したキーワードである「感謝」をかたちに表す活動を展開することで、家族、下級生、中学生、恩師等、人とのよりよい関わりに向けた能動的な働き掛けをすることの大切さにたどり着くというストーリーを描いている。授業者は学びの伴走者に徹し、児童一人一人に寄り添った多様かつ周大な仕掛けを施すことで、相手意識をもって「感謝」でつながり合う、自律した学習者の姿に迫る授業デザインとなっている。

2 本実践から見えてきたもの

(1) 学びのストーリー性

前題材「生活時間を見直そう」における家族との「団らん」の検討によって膨らんだ「感謝」の気持ちが、本題材を貫くキーワードとして構成されている。「感謝」をかたちにしたいという児童自身の必要感によって題材間に連続性が生まれ、ストーリーが展開していく構造である。また、家族以外にも当てはめた「団らん」の解釈により「感謝」の対象を広げたり(空間軸)、教室のカーテンや中学校体験入学など、これまでやこれからのドラマを意識したり(時間軸)することで、学習者である児童一人一人がストーリーの主人公になり、題材を通して課題解決に没頭する姿が期待できるものである。

(2) 学びの伴走者としての授業者

本実践は、児童一人一人の「感謝」の対象が異なる上、それをかたちにするための手段としての知識や技能の習得の程度も異なり、人との関わりに係る経験や環境等実態も様々であることから、他の題材以上に児童一人一人の学習状況の丁寧な見取りが求められる。

そこで授業者は、「家庭科 学びの履歴」をまとめ、題材を通してそれを活用しながら、児童一人一人の思いや願い、アイデアを最大限生かすことができるよう、学びの伴走者に徹した。多様な視点から解決を目指すことを促す課題別グループの設定、児童の気付きやつまずきを生かし視覚的に解決への道標とするメッセージの掲示、これまで(小学校)とこれから(中学校)を見通し、自身の習熟度を客観的に認知することができる「家庭科マスター度」の活用など、先回りして道をならすのではなく、でこぼこ道でも児童が自身の力で解決に向かっていく実感がもてるような様々な仕掛けを講じていた。児童が「感謝」をかたちにすることを他人事とせず、「何のために何をどうするか」を自分の言葉で説明し、活動に取り組む様子から、この学びが一人一人の生活に着実に落とし込まれていくであろうことは、想像に難くない。

(3) 学びにおける相手意識

本実践では学習全体を通して、「感謝」の対象である家族、下級生、中学生、恩師等が存在し、協働的に学ぶ仲間が存在した。「〇〇のために」「〇〇と一緒に」「〇〇のお陰で」といった相手意識は、実践的な態度の育成を目指す家庭科において、学習効果をより高めるものであり欠かすことができない。「団らん」という既習事項を様々な相手に置き換え、「感謝」でつながり合う学習経験をすることで、児童は人とのよりよい関わりに向けた能動的な働き掛けをすることの大切さを、実感をもって理解することになったと考える。

3 今後の展望

生活も人生もひとつながりであり、第5・6学年限定で授業時数も限られている家庭科においては、家庭や地域との連携、他学年や中学校、他教科等の学習との関連を図ることによって、ねらいの達成のみならず相乗効果も期待できる。自律した学習者の姿を目指し、カリキュラム・マネジメントの視点をより重視した、内容B・Cの授業デザインの提案にも期待したい。